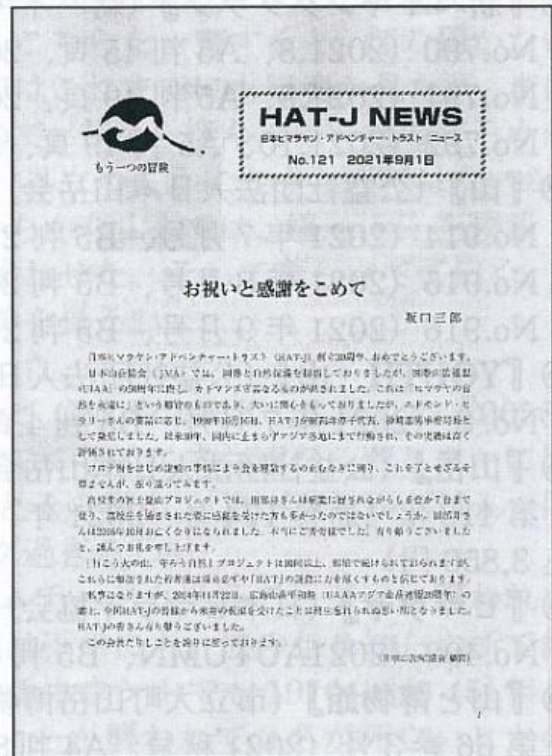


1990(平成2)年、国内山岳4団体によって発足し、田部井淳子氏が代表となる。2017(平成19)年にはNPO法人(特定非営利活動法人)化。その後、田部井氏を喪ったものの、昨年には創立30年の節目を迎えたばかりであった。

HAT-Jはこの30年余に亘り、山岳自然環境団体として数多の成果を生んできた。国内外での清掃登山、子供達への環境教育、国際交流、更には東日本大震災の被災地支援、等々。これらは、2015年に国連総会で決議され近年喧しく言及されている「SDGs」(持続可能な開発目標)を先取りしたものであり、普遍性を有する活動である。

約1,600名の会員で出発した会も、本年6月開催の総会時点での有効会員数は約280余名であった。加えて、昨今は新型コロナウイルス感染症の影響で活動の中止・縮小を余儀無くされ、解散に至った。然しながらHAT-Jの活動とその精神は、支部を通じて全国各地で、国際交流を通じて海外で、そして環境教育を通じて次世代の人達に、確実に持続・継承されてゆく筈である。



◎『黒部の魔神 大タテガビン南東壁物語』 田中文夫 著・発行

A4判 16頁、2021年8月発行、実費にて頒布

田中文夫・元評議員による、若かりし日々の登攀の記録。

「黒部3大岩壁」、すなわち丸山東壁(黒部の巨人)、大タテガビン南東壁(黒部の魔神)、奥鐘山西壁(黒部の怪人)は、いずれも高度差500mを超え、オーバーハングを随所に有する日本有数の岩場。第四紀黒部川花崗岩(類)を幾筋もの破碎帯が横断し、それらは「黒四」建設の大きな障壁になったのみならず、これらの岩壁の登攀を困難ならしめる要因の一つとなっている。

高さのみならず「より困難」たる「6級A3級登攀」の岩壁をも目標



とする「ヒマラヤ鉄の時代」(≒人工登攀の台頭・興隆期)を迎えた1960年代、「黒部の魔神」のルート開拓も進められる。田中会員も1974年横浜山岳協会隊「P29南西壁」(7514m)に参加するも、南西壁基部(約6000m)で撤退。大タテガビンでの2度の訓練の後、1978年秋にP29南西壁に再び挑むも、懸垂氷河の崩落に伴う爆裂風で4名が吹き飛ばされ、唯一人生き残ったのが田中会員。大タテガビンには1969年以降通い続け、1,500mの高度差があるP29南西壁での空間感覚を養う為にはうってつけであったとの事(空間感覚は圧縮され、500mも1,500mもあまり変わらなくなる)。

〈私の身体能力が不向きであることは、当時から承知していた〉(p.14)としつつ、アルピニズムの変遷、そして、その事実上の終焉について記す。「低成長平準化社会」の中で登山は「産業」に組み込まれ、「公助」の介入によって「登山者個人の人間総合力の劣化」を招いたとする。〈今や私に「大タテガビン南東壁」は登れない〉が、〈真・善・美・そして自由を求める「情熱」があるかぎり…!／そんな心意気で、今も丹沢へ向かっている!!〉(p.16、斜線は原文における改行)。

◎『山を楽しみ山に学ぶ一山に行く前に…』(自然保護絵本シリーズ2)
小野木三郎 絵と文 楽習庵・山楽山歩亭(飛騨高山ふるさとを歩こう会)編・発行

A5判45頁、2021年8月発行、実費にて頒布

小野木三郎・本学会評議員は、永年に亘り岐阜県内で小中学校教諭や博物館学芸員を務め、現在も飛騨山脈(北アルプス)の環境保全に携わる。(財)日本自然保護協会の自然観察指導員講習会の専任講師でもある。

飛騨山脈にも、見るべき事・知るべき事・愉しむべき事が無数にある。例えば、バスやタクシーで山頂近くまで登れ、多くの人が訪れる乗鞍岳(3026m)も然り。〈夏に雪があつて涼しいな…〉「すごい景色だ…」だけで帰っては山の楽しみ方としてあまりにもったいないことです。(pp.2-3)。外来生物や大規模開発等の問題についての提起も怠らない。

動物達がブナの樹に触れば「髯る樵(なぶるぶな)」(p.4)、風で倒されて逆さまになったシラカンバは「馬鹿らしい白樺(ばからしいしらかば)」(p.6)といった具合に、回文が出来る。そんな遊びのネタも、山にはある。

イラストと平易な文章で「山に学ぶ『山学』」「山を楽しむ『山楽』」を説き、「楽山、遊山、知山」の助けになる事を願う。「山学」は、齊藤一男・初代会長が提唱した本学会のコンセプトと合致する。「遊」の字には「付き合い・交わり」「友達」「自分の説を説きまわる」「旅」「修学・見物・仕官等の為に他国に出る」とい

